

講演；「 罪を犯した人たちによりそって・・・～更生保護のいま～」

講師；上田 京子 さん （佐賀県保護司会連合会 事務局長）

## 総括

（参加者）佐賀県内の市町行政関係者、教職員の皆様等187名の参加

（あいさつ）佐賀県人権・同和教育研究協議会 橋本 直史 副会長

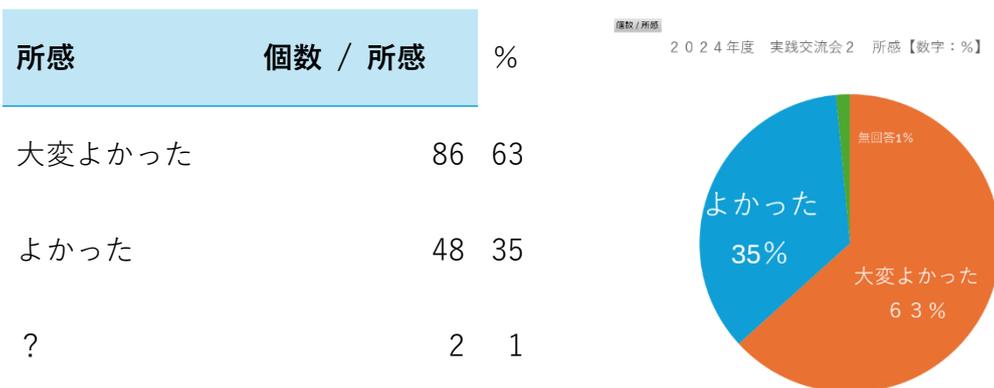
・参加いただいた皆様には、本日学んだことを持ち帰り、多くの方と共有し、より幅広くより力強い実践につなげていただきますことを祈念しまして、主催者挨拶といたします。

（基調提案）

・今後、「人権啓発・人権教育を日常において、どのように仕組んでいくか」が差別をなくすカギだと言ってもよいのではないのでしょうか。私たちの「立つ位置」を、常に周囲の人々と共に、問い続けていきましょう。

## アンケート集約

2024年度 第2回実践交流会 参加者アンケート集約 （ 回答数134 ）



### 【感想及び意見等】

- ・（小学校教員）更生保護の理念は十分理解できるが、自分の身近なところだと考えると非常に難しいと感じた。グループ交流では、同じグループ内に虹の松原分校で勤務経験がある方のお話を聞いて、大変参考になった。
- ・（小学校教員）制度的な内容については、学校現場と直接関わらない部分だったので難しく感じた。事例「避難所での出来事」を通して、NIMBY を体感できた。立場が変われば、自分自身の気持ちや考えも変わってしまうため、相手に理解してもらおう、分かり合おうと思っても、簡単ではないと感じた。罪を犯した人の罪の内容やその人の人となりによって、地域や社会の中で理解されたり受け入れられたりすることは異なると思うので、難しいと感じた。
- ・（小学校教員）保護司会の活動やその成果と課題がよくわかりました。なかなか困難な課題に懸命に取り組まれていることに、敬意を表したいと思いました。また自分が保護司になるとしたら、これもまたなかなか困難なことに取り組むことになるなと思いました。
- ・（小学校教員）初めて聞くことばかりで、とても有意義な時間だった。特に、佐賀県の現状、保護司の活動などが印象に残った。ただ、事例で考えた時に、自分ごととして捉えると、罪を償った人を受け入れるとは言い難いなど思った。一人でも犯罪者をつくらぬ社会のために、教育の必要性を感じた。
- ・（小学校教員）更正保護の視点から人権・同和教育を考えることが斬新だった。避難所の話も、かなりかんがえ

させられる。そもそも、犯罪者の経験も立場にもなったことないし、身近にもいないので。しかし、どれも誰も公平平等って、本当に難しいものだと感じた。この事に限らず、様々な立場の人がいることを改めて感じた。

・(小学校教員) 保護司に興味はありますが、コミュニケーションをとるのが難しいだろうと躊躇します。ドラマ等で観る保護司の方は大変そうに見えます。そして無給のボランティアなのですね。再犯を無くしたい国の取り組みとしては不十分だと感じました。

・(小学校教員) 保護司の方の役割や活躍が分かりやすいと思いました。普段、法律について学ぶ機会が少ないのですが、罪を償うための段階や保護司としての苦悩を学ぶことができました。能登半島地震の際の事例は、立場によってそれぞれ考えや思いがちがうため、どんな行動をするか判断することが難しかったです。みんなに生きる権利があるものの、気持ちよく生きていくのはとても難しいことだと実感しました。

・(小学校教員) 近代法の精神が教育刑であり、受刑者の社会復帰を前提としている点で保護司の役割は大きい。ただ、日本を含むアジア圏では刑罰を見せしめとしての懲罰刑として見る風潮が強い。この傾向はなかなかそう簡単に変化しないだろう。日本人の犯罪を憎む感情や交番制度などが、ある意味、低い犯罪発生率を実現させている要因となっているのかもしれないし、逆に犯罪を憎む正義感や加害者への処罰感情、被害者への同情が出所者の更生を阻害している可能性もある。日本の低い犯罪発生率で犯罪を犯す人の約半数が再犯してしまうという事実は、どうしても犯罪に誘引されやすいタイプの人がいるということを表している可能性がある。どういうタイプの人々が犯罪に誘引されやすいのかについて興味がある。そこで【05】「いろいろな問題」のスライドについて、問題として挙げられている「教育」「虐待」「貧困」「住居」「仕事」「高齢」「病気」「障がい」「世間の偏見への不安」について上田さんに一つ質問したい。再犯する人は、これらの問題の中でどれが最も主要因、すなわち大きなウェイトを占めているものなのでしょうか？そこを突き詰めたら刑務所内における更生プログラムのあり方や保護司の活動の在り方が変わってくるような気がします。

・(小学校教員) 更生という言葉は聞いたことがありましたが、保護司という役割を初めて知りました。保護司という役割があるから、罪を犯した人たちが社会に復帰しやすくなっていると感じました。しかし、能登半島地震の例を聞き、罪を犯してしまった人が復帰するにはハードルがたくさんあることがわかったし、周りの人たちの協力が必要だとわかりました。普段の人間関係でも大事ですが、まずはお互いのことを知ることから始め、その人の今を大切にできたらと思います。

・(小学校教員) アンケートについて…冒頭にて「個人の電子機器端末を使用するため、注意を」という旨を喚起があり、よかったです。○「立ち位置」…常々アンケートにも書いていますが、佐同教としてどの程度「身体部位に触れた表現」について評価されているか、そして共通理解を図られているのか甚だ疑問です。ご挨拶や発言、文書内の表記も個人に由りけりですし、個人の心掛けで留めている方もいれば注意喚起をしていく方もいらっしやいます。統一、徹底できないのなら一切言及するべきではありません。○質疑応答について…「講師の演題『罪を犯した人』ではなく『罪を償った人』と言い換えられないか？」今回の講師があのように好意的に受け止めていただいたので良かったものの、講師によっては気分を害されていたかもしれません（少なくとも自分がその立場なら完全に拒絶します）。司会から何らかのフォローをされるものと思っておりました。演題や講演内容とは、講師が多忙の中、理由や意図があって言葉を選び設定し、参加者はそれを享受する立場であるはずですので、表現の受け止め方は個人内で留めるべきです。第5分科会のことがすぐに頭をよぎったので、書かせていただきました。人権・同和教育の学びの場におけるこういったやり取りは何とかなりませんか？

・(小学校教員) 上田さんの講演がとても印象に残り、また考えさせられました。更生に対して協力的でありたいとは思っているものの、実際の生活で身近なものになったときに、どれだけ行動に表せるか難しいなと思いました。ただし難しいで留まらず、少しでも出来ること、まずは知ることから始めるなど、協力体制を整えて行きたいと思いました。

・(小学校教員) 私は保護司という仕事を初めて知りました。罪を犯した人に寄り添い、その社会復帰を支えるという仕事で、とても難しい仕事だと感じました。特に難しいと感じたのは、地域活動の仕事です。地域活動とは、

地域の方々に立ち直り支援への理解と協力を求め、安全安心な地域づくりを行うための活動のことと知り、とても大変なことだと思いました。講話の中で、能登半島の被災の時に、前科がある人が「避難所に入所したい。」と申し出てきたが、周りの理解が難しく、辞退されたという事例を聞きました。正直、自分が避難所で生活していたらと考えると不安になる気持ちはとても分かったと感じました。しかし、その気持ちだけで、公共の場に前科のある人は入れないという考え方を持つのも問題があると思いました。講師の上田さんが言うように、前科がある人の事も話を聞いてみようという考えを持つこと、一人ひとりを知ろうとすることが安全安心な地域づくりをするためには大切なことだと改めて思いました。

・(小学校教員) 更生保護についての理解を深める貴重な機会となりました。特に、犯罪を犯した人が社会復帰する際に直面する壁の大きさと、それを支える更生保護の重要性が印象的でした。講演では、更生保護施設や保護司の具体的な活動が紹介され、制度を支える人々の熱意が伝わってきました。今回の講演を通じて、「罪を犯した人」への先入観を見直すきっかけとなり、人をどう支えるかを考える重要性を学びました。事例での検討会から、NIMBY について触れられました。「今を見てください。」という言葉が深く心に残りました。今後、学校教育でも、共に生きることの意味を子どもたちと考えていきたいと思えます。

・(小学校教員) 罪を犯した人と関わりをもつ可能性を自分事と考えた際に受け入れることが難しく感じました。それではいけないと思うので、どうにか知ろうとする気持ちをもつことが大切であると強く感じました。また、これらのことを子供たちに還元する方法について考えていかなければいけないと思いました。

・(小学校教員) 今までにあまり聞いたことのない保護司という職業からの人との関わり方や人生を再生するためのサポートの難しさを知ることができました。どうしても加害者、被害者という立場で事件をみてしまうため、被害者のことを思うと簡単に罪を犯した人の行動を許すことができなかつたり、社会復帰されたあとも同じようには関わらなかつたりする部分があり、分かっている部分もたくさんあるなど感じました。

・(小学校教員) 他の先生方の正直な意見が聞けたことや、保護司について活動内容や実例など詳しく知ることができて良かった。私も、教師という立場から子どもたちに保護観察中や罪を償った人たちについて差別をしないよう、人権感覚を身に付けさせていきたいと思う。

・(小学校教員) 今回、初めて実践交流会に参加しました。保護司の活動や刑を償った方への関わり方について知ったり考えたりできました。避難所での事例についてそれぞれの立場から考える活動がよかったと思います。NIMBY の考え方は、どの人権課題にも通じる考え方だと感じました。社会全体として、罪を償った方への見方が変わるように自分にできることは何か今後も考えていきたいと思えます。

・(小学校教員) 無関心が一番良くない。知ること、関心をもつことが大切。

・(小学校教員) まず、様々な人権課題の中でなかなか取り上げないテーマを取りあげたことが良かったと思います。ただ、講師の方のお話の前半は概要に関するものが多かったように思います。グループ協議を経た後からが知りたいこと、聞きたいことが多かったように思いました。なかなか難しい問題ですが、やはり、基本は対話が必要なのだと思います。また、講師の方の話にもあったように、過去ではなく今を見ることも大事だと私も思います。これは犯罪を犯した人だけではなく、すべての人に当てはまることだと思います。人は、誰でもいい方向にも悪い方向にも変わるものだと思うからです。

・(小学校教員) 地域では、いろんな人からの支えがあって成り立っていることを実感しました。助け合う心、大切にしたいです。

・(小学校教員) 更生保護についての講話は初めてだったので、大変勉強になった。事例を使っての演習では、自分自身の中に、理解と実践との間で距離を感じた。分かっているけれど、実際には一歩踏み出せないという現実。偏見は、今回の事例に限らないが、今回の講話を聞いて少しずつでも実践に向かうよう意識していきたいと感じた。

・(小学校教員) 学生時代に非行少年と関わるボランティアをしていたことを思い出しました。はじめはやはり「怖い」という気持ちが強かったです。しかし、一緒に料理や奉仕活動などの活動をするうちに、過去にどんな

ことをしてしまったのか等は気にならなくなりました。その時間をひとりの人間として関わることで同じ時間を楽しく過ごすことができました。相手を知ること、怖い、不安というネガティブな感情は軽減していくということをもつて感じることができました。関わる機会をもつこと、お互いを知ることで見えない壁もなくなるのではないかと思います。貴重なお話を聞くことができました。ありがとうございます。

・(小学校教員) 更生保護の活動について、普段考えた事があまりなく、改めて自分の中の本音と人権意識について、問い直す時間となりました。学校教育に携わっている立場から、今回のような、罪を犯し償った人にも人権があり、いろいろ立場にある人が一緒に生活していく寛容な社会を作ることを、子どものうちから学ぶ必要性を感じました。ありがとうございました。

・(小学校教員) なかなか聞けない保護司さんの話を聞くことができた。事例検討が一番参考になった。ただ、無償でボランティアであることや、能登の被災地の話から立場の弱さなど、課題も多いことも分かった。公務員としての自分の人権感覚を磨くよい機会となった。

・(小学校教員) 実際に保護司の方の話が聞いて良かったです。ボランティアは、あり得ません。厚生させる力や、命を懸けて立ち直らせる努力をされているので、国に訴えたいです。

・(小学校教員) 罪を犯した人に一線を引くのではなく、再チャレンジを与える目をもつ。偏見をもった目で見ると相手のことを知ろう、理解できるところは理解しようとする思いをもつ。

・(小学校教員) 「差別はいけない」と知っているし分かっているのに、それでも距離をおこうとしてしまう気持ちを自分も持っているにも気づかされました。しかし、知らないことで、さらに差別が生まれ、広がってしまう。まずは「知ること」「話すこと」、その人がどんな人か、どんなことを思っているのか、願っているのかを知ることが大切と思った。他の方々とのグループ討議があって、他の考えや思いを聞くことができ、よかったです。

・(小学校教員) 事例の能登半島地震の被災地から「避難所の出来事」を通して、NIMBYの現状と、どのように向き合い、どう考え、行動すべきかについて、意見交流をしたり、自分自身の内面を見つめたりするよい機会となりました。“今を見る”ということ“対話等を通して知ること”等が大切だと感じました。今後生かしたいと思います。ありがとうございました。

・(小学校教員) 今まで聞いたことのない内容だったので、知る機会となりました。大変よかったです。再犯率が高いのを下げていくために教育が果たす役割も大きいと思う。教育の場の、どの段階で扱った方がよい内容なのかなと考えました。

・(小学校教員) 「社会を明るくする運動」佐賀地区住民集會に、昨年7月参加をしました。今日のお話の中でも、能登半島での事案、公的スペースの借用をめぐる保護司さんの葛藤から、真に犯罪の差別が解消されていないのだと、まだ道りは長いということを感じました。併せて無罪推定の原則は、学校における児童間トラブルの聞き取りにおいても大切にしたいと思った次第です。丁寧に聞き取りをすること、加害者側にも何らかの事情があったことを推察することに努めたいと思います。

・(小学校教員) 犯罪自体はケースバイケースだと思いますが、多くは「やむを得ず」とか「出来心で」等ではないかと察します。にもかかわらず、再犯につながるのは、やはり社会の受け入れ、偏見や差別だろうと思います。昨年、北九州の「抱僕(ほうぼく)」の話を聴きました。この団体は、主にホームレスや家に居場所のない人たちの居場所(心を含めて)だったので、「社会に誰も取り残さない」「助けてと言え社会」などを理念とされていました。今日の保護司の活動も、似たような理念でされているのかなと思いました。私自身もこの活動に興味関心を持ちました。セカンドキャリアの候補の一つになるかも・・・と思いました。

・(小学校教員) 事例研をしてみて、自分の考えを認識することができた。一人でもいいので、相手のことを考え、よりそうことができるといいなと思いました。自分その一人になれるように、自分の生き方をしっかりと考え、どんな人になりたいのか、これからも考えて自分を見つめていきたいと思います。今日の人権問題について話を聞いていましたが、全ての人権問題の根本は同じような気がします。偏見や差別、正しい知識を知らないことなど、それらのことをしっかりと考え、そのことをみんなで考え知らせていくことを地道にしていくことが大切

だと思えます。

・(小学校教員) 今までにない視点から差別問題について切り込み、掘り下げられている講演が聞いて良かったと思う。

・(小学校教員) とても考えさせられるお話でした。話を聞いて受け入れなければいけないと思いながらも、やはり被害者の心情を考えてしまいます。実際、自分の近くに罪を償われた人が住んでいたら受け入れることができないような気がします。ただ、受け入れてもらえず再犯ということも考えられるので、「受け入れなければ」という思いもあります。保護司は給料をもらうべきだと思います。

・(小学校教員) 災害が多くなって来ている中、あり得る事例でした。考える機会ができて良かった。保護司が中心となった組織を形成して、復帰のコロニーのようなもので支援できないのでしょうか。障がいのある人に対しての家族のような支援施設のように弱い立場の方のための地域づくりを、国の意識の元で行えたらいいですね。保護司の方の負担を軽減できないものかと思いました。

・(小学校教員) 私は、昨年5月保護司が殺された事件をニュースで聞いて、保護司のことを知り、少し調べていた。今日は、保護司のことについて詳しく知ることができ、大変勉強になりました。今、ネットで小さな事件を起こしても、その人の顔写真や、様々なうわさがすぐ広がってしまう時代で、とても大変だと思います。その人を知る、相手と話をすることの大切さも学びました。私たちの心の中にある NIMBY、確かにそうだと思います。ありがとうございました。

・(小学校教員) 初めて聞く話ばかりで、とても学びになりました。みな1人ひとり人権はあると頭では分かっていますが、一度罪を犯したことや、被害者の気持ち、自分の安全を守るため・・・などいろいろと考えてしまいます。事例であがった震災の件も、講話が終わった今でもいろんな思いがあふれています。ですが、保護司のみさんの活動を聞いて、偏見や差別についてしっかり考えること、ゆっくり考えることが大切だと感じました。

・(小学校教員) 犯罪を犯した人の人権について考える機会があまりなく、興味深い時間だった。「その人についてよく分からない」ことが、敬遠につながるのかなと考えた。そこに、犯罪歴がラベリングされると、近づき難いのかなと思った。まずは個人を知ることが必要であると思った。

・(小学校教員) 罪を犯した人の再犯率が高いことから、出所後の支援が大切であることは理解していたつもりでした。負のスパイラルを打ち切るためには、周囲の手助けが必要だとも思っていました。ただ、能登の事例を考えた時、(自分のいないところで)(自分じゃない誰かが)対応して欲しいと思ってしまいました。根本的な捉え方、考え方を変えなければと痛感しました。たくさんの気づきをいただき、ありがとうございました。

・(小学校教員) “罪を犯した人”というだけで決めつけてしまうことが多い。社会の中で更生し、同じくらしをしてほしいと思う。明るい場で明るいふれ合いの場を設けてわかり合えるようになりたいと思う。しかし、再犯者率を見ていると不安があり、分かり合えるのだろうかとも思っています。避難所の事例は、受け入れ難い・・・。罪を犯した人の問題を聞くと、学校教育の大切さを改めて感じる。「助けを求める人がいない」、ということを知り、人とふれ合わない今(リモート・ネット社会)の世の中で大丈夫かなと思った。

・(小学校教員) テーマに興味をもって参会しました。今まで知らなかったことを、色々聞くことができてよかったです。本校の近くには麓刑務所があり、そこにお勤めされている方のお子さんも10数名在籍しています。今回お聞きした内容を、どのように子どもたちに伝えるかが難しいなと感じました。機会があれば、そのような実践例をうかがいたいです。

・(小学校教員) 今回のような「罪を犯した人に寄り添う」という講演は、初めてでした。罪を犯した人への立ち直りへの支援ということについては、近くで見守り支えていくものと、どこか人ごとだと思っていました。実際、自分にもおとずれる今回のような例について、考える時間をもらった時、私にも直面する時がくる。その時、どう対応できるのか? また、私自身にどのように対応してもらえるか? 今回の問題について、かなりマイナスな気持ちでいる自身に気づかされました。

・(小学校教員) 相手のことを知ることの大切さを感じました。知らないことで差別につながっていくと思いま

した。罪をつぐなおうとする人に寄り添うことで、保護司という大切な役割があることが知れましたが、福祉や教育、地域といろいろなところと繋がっていくことで、一人ひとりを正しく理解し、更生に向かえると思えました。

・(小学校教員) ボランティアだとは驚きました。国が少しでもお金を出してくれないかなとも思います。命がけで危険だし。保護司の方の仕事がわかってよかったです。とても大変そうでした。地域の人々と一緒にやっていたらいいとも思いました。(理解する社会) 能登半島地震の被災地の避難所での出来事、考えさせられました。

・(小学校教員) 実際の事例を通して考えることで、自分の中にある気持ち NIMBY に気づきました。「罪を犯した人が近くにいたら受け入れなければならないとは思いつつ、すんなりとは受け入れられないと思えました。周りが受け入れないと再犯率が高いまま・・・難しい問題です。今回考える機会をいただいてよかったです。本人の問題だけではないことも多いことを知り、自分ができる支援を考えていきたいと思えました。

・(小学校教員) 事例検討を行われる方法がとてもよかったと感じました。付箋を使って3つのパターンを考えること(3つの視点)と同時に、他の学校の先生方の意見も聞くことができ、多面的に知り、考える時間となりました。上田さんの使われる言葉1つ1つに思いや優しさが込められていて、温かい気持ちになった講演だったと感じました。

・(小学校教員) 保護司という存在は知っていましたが、今日のお話を聞いて、どんなことをしているのか等、具体的に分かりました。大変勉強になりました。更生保護に立ち直りに必要な4つの環境ということがありましたが、この4つは、学校教育の中でも必要なことだと思えました。そうすれば、予防につながると思います。ぜひ、この話を教育現場でお話していただきたいなと思えました。本当にありがとうございました。再犯防止のためには、持続的な正しい人とのつながりが大事だと思えました。そのためにも、保護司さんだけでなく、社会全体でこのことについて考えていかなければならないと強く感じました。

・(小学校教員) 人権問題の中でもあまり聞いたことのない話で、とても勉強になりました。被災地での件や、NIMBY が本当に難しいと感じました。でも、貧困からの再犯が悪循環で何とかしいないといけないなとも思います。犯罪を犯した悪い人とひとくくりに見るのではなく、対話したり、その人のことを知ったりして、その人の今を知り、受け入れるのが大切だと思えました。

・(小学校教員) 更生保護活動は、どういうことをしているのかを知ることができ、罪を犯した人たちによりそうことが大切であると感じた。避難所の出来事の実例は、人権問題について考えるよい教材だと思う。

・(小学校教員) 普段の生活の中ではあまり触れることのない保護司や罪を犯した人に関する話が聞けたことは、大変意義深かった。あまり気にしていなかったが、自分の身の周りにもそうした人が必ずいると思うので、実際にそういう人に接した時に、どのように行動するのか考えておきたいと思った。

・(小学校教員) 異なる職業の方のお仕事内容を詳しく知ることができて、とても新鮮な気持ちになりました。興味をもって参加することができました。自分で考えることの大切さや自分にできることをこれから考えていきたいと思えます。教育の分野で子どもたちに教えていくこともとても大切だと思えました。

・(小学校教員) 罪を犯した人との関わり方を、普段教えることがなかったので、この機会に考えることができよかったです。受け入れる人、そうでない人、いろんな意見はあるけれど、少しずつ自分も受け入れられたらな、と思えます。

・(小学校教員) 罪を犯した人たち、その周りの人たち、私の立場等、様々な立場から考え、ジレンマを感じました。“NIMBY の気持ち”と向き合い、きれいごとでは済まない、現場で自分はどうか立ちふるまえるか考えさせられました。私の祖父は保護司をしていましたが、幼い私は自宅に来る人を見て(自宅から出て行き、すぐにたばこを吸い、帰る高校生)怖さを感じていました。罪の犯した人、保護司、その家族たち、それぞれ守られるべきだと感じました。

・(小学校教員) 能登半島地震の時に、「罪を犯した人」の入所について話が出たことは、ニュースで知っていたが、今日自分が罪を犯した側の気持ちになってみて、罪を犯した人の生きづらさが改めて分かった。罪を犯した

人が更生できるように、もっと温かい気持ちや目で見守ることが大事だと思いました。

・(小学校教員) 知らなかったことばかりで、とても勉強になった。しかし、私自身が次のステップに進まないと、しょせん「他人事」としてしか考えていないことになるかと思う。自分、及び家族を安全地帯に置かないと行動できないように思う。保護司及び罪をつぐなった人の個人情報を守ることは重要なことと思う。

・(小学校教員) 保護司という立場の方から、私の知らない話を聞くことができ、大変有意義でした。避難所でのお話はいろいろ考えさせられました。ただ、これは、部落差別の結婚問題に通じるものもあると思いました。その人も困っているのだから、「いいですよ。さあ、どうぞ。」と快く受け入れることで信頼が生まれるのではないか。そうすることで、罪を犯した人も更生できるのではないか。もちろん、多数の方の不安も分かりますが、こういうときこそ助け合いだと思います。だから、「いいですよ、さあどうぞ。」と言えるようになりたいと思いました。

・(小学校教員) 更生保護の現在について、様々な資料を使って分かりやすく講話いただきました。講話途中での事例検討やグループワークなど、最後まで集中して学びを深めました。先生の熱い思いもお話をいただけ、非常にためになりました。

・(小学校教員) 保護司の話はなかなか聞く機会がないので、大変学びになった。法律の話、保護司の仕事内容や設立など、言葉としては知っていることもあるが、知らないことも多く、改めて正しく知ることの大切さを考えた。テレビのドキュメンタリー番組で知ったことや、様々なメディアでとりあげられていることの中に、軽犯罪をしてしまった人の中に、発達障がい傾向の人がいるという。私たちは、教育現場で、また、社会とのつながりの中で、いろいろな人が安心できる場、交流の場、そのつながりの大切さを感じる。能登半島地震の被災地の話の中で、自分がそれぞれの立場になった時、自分一人としての考え、家族を守る立場としてしての考え、車中泊をしていた人の考え、様々なことを考えてすぐには決めきれない自分がいました。お互いに話すこと、相手を決めつけなくて、相手の立場に立つこと、言葉としては分かっているがなかなかできない自分との折り合いのつけ方なども含めて、子どもたちと考える課題はたくさんあると感じた研修でした。ありがとうございました。

・(中学校教員) 以前視聴した東野圭吾原作の映画(山田孝之、沢尻エリカ主演)で「手紙」という作品を思い出しました。犯罪者とその家族の絆の物語ですが、その中に次の台詞がありました。「なぜ関係ない私たち(犯罪者の家族)まで差別されなくちゃいけないの?」の質問に、社長さんが「それを含めて犯罪に対する罰なのだ。犯罪を犯すことによって、家族にまで罰が及ぶということが、犯罪の抑止になるのだ。」というようなことを言っていたのが浮かんできました。今も自分の気持ちはこちらの方に近いかな・・・?

・(中学校教員) 保護司の方の役割や、現在の問題点を改めて知ることができた。人権は人として誰にでも大切と理解しているが、自分として、地域として、まだまだ考えていくことがたくさんあると思う。地域社会のつながりが、希薄になっている傾向があるので、まずこの部分を深めていけるように、自分も活動できたらと思います。

・(中学校教員)「避難所での出来事」の演習を通して、「立ち直りを支える社会」が必要と分かっているが「NIMRY」の気持ちが沸くことが実感できた。その人の今の生活ぶりなど、今を見ることの難しさを感じた。人生の大切な時に差別にあうかもしれないことをよく理解し、自分が差別する側にならないように心がけていかないといけない。

・(中学校教員) 身近ではないが、確実にある「罪を犯した人」への偏見や差別について知ることができました。更生に関わる上田さんからお話を聞けたからこそフラットに学ぶことができたように思います。また、能登半島地震の避難所の事例についての意見交換で、差別偏見をなくすには、やはり対話が大切なのだと感じました。

・(中学校教員) 罪を犯した人に対して、社会復帰を促すための周囲の理解、支援が必要だと思った。特に保護司の方がどのように関わっているかということを知ることができた。犯罪加害者の社会復帰の道は決して楽なものではないと個人的には思う。加害者の反省、自分の特性にどう向き合っ前向きに生きていくのか、その思いを周りも支える。やみくもに周囲が加害者に冷たい目、心ない言葉をぶつけることはあってはいけない。「鶏が先か、卵が先か」ではないですが、加害者が頑張る、周囲が頑張る、どちらかではなく、どちらも大切なのではな

いかと考えさせられました。

・(中学校教員) 保護司の方の話ということで大変貴重な体験ができた。「罪を犯した人」という見方をどうしてもしてしまう。しかし、上田さんが言われたように、社会復帰のために頑張っているということも理解すべき。なかなか難しいとは思いますが保護活動だと分かれば良いのかなと思う。できるか分かりませんが、事例検討、とてもよかったです。無償でやられていること大変素晴らしいと思いますが、やはり報酬はあるべきなのではと感じました。

・(中学校教員) 学校においても刑事事件を犯した子どもを受け入れることがあります。色々な不安を感じますが、再犯しないようにその子を理解し、防止に努めるよう、周囲に呼びかけます。今回の講話を拝聴して、「刑期を終えた」と頭で分かっている、心から受け入れることは難しいと思います。しかし、地域でのその人が再犯しないように支援することが当事者を周囲の幸せにつながると感じました。

・(中学校教員) 本日のお話を聞いて、保護司さんの仕事や、罪を犯した人に対する問題について知り、考えることができた。罪を犯すつもりもなく犯してしまい、心から償い、社会への復帰をめざす人も多く、そういった人に対して差別が大きいのはつらい状況であり、なんとかしなければと考えさせられた。が、すべての人がそうなのか？という疑問もあり、何らかのスイッチでまた罪を犯すのではないのか？という不安も大きい。今日のお話にあったように、相手を知り、今の本人をしっかりと見ることが大切だと思いました。(それは罪を犯していない人に対しても同様だと思いますが・・・)

・(中学校教員) 保護司が無給なのはなぜなのか。有給で活動してもらえないのだろうか。罪を犯した人への差別と部落差別はどうちがうのだろうか。部落差別はいわれのない差別だが、罪を犯した人への差別は、理由があるからといって差別を認めていいのだろうか。障がい者差別は、障がいがあるからといって差別していいのだろうか。【表現について】「安全・安心な県づくり」という表現は間違っている。「安全な県」はいいが、「安心な県」はおかしい。「安心する」という動詞の一部なので、「安心」に「な」がつくことはおかしい。「安全で安心できる県」というのが正しい表現だと思う。言葉は正しく使いたい。

・(中学校教員) 今まで考えてこなかった内容で、あ、そうだったのかと考えさせられる内容で、自分にとって、とても意味があったものだと思います。今、いろいろな意味で、人権という大きな枠組みの中で、様々なことが問題になってきていることを踏まえると、変化していく中で、とてもよかった内容ではないだろうか。

・(中学校教員) 普段全く考えたこともないような罪を犯した人たちの社会復帰の苦悩、実状など、聞いたことはある程度あったが、実際の保護司の上田氏の話聞いて、目から鱗でした。避難所の3例についての演習でも気づき、考えさせられた。今まで他人事のようにしか考えていなかったことが改めて分かった。グループ交流では違う考えが聞けて深く掘り下げることができた。最後に上田氏が言われた「罪を犯した人は、社会復帰をしようと努力している」その人その人なりを見てもらうことで、一步一步スモールステップで進んでいる。ネットワークを広げたいと思いました。

・(中学校教員) 保護司さんの仕事内容がとても多いと分かった。罪を犯した人を軽蔑するのではなく、1人の更生者として、社会で受け入れてあげたいと思う。再犯率を佐賀県では55%以下にしようとめざしていると知れた。事例を考える(共有する)時間がとても勉強になりました。「人を知る」ことを大事にします。

・(中学校教員) 更生保護や保護司の活動について、具体的な話を聞くことがなかったので、大変勉強になりました。NIMBY すべての人権問題のキーワードとなる言葉だと思います。自分の領域に近づいた時に、きれい事ではなく、自分事にして考えるようになる。まさに、人権問題は、「よそ事、他人事、過去の事」ではないという事である。自分の領域に近づいてきた時に、どう考え、どう動くか、そこが問われていると思います。

・(中学校教員) 世の中で犯罪を犯して更生をめざしている方は多くいらっしゃいます。しかし、なかなか表面には見えない、聞かないところなので、しっかり考えていくべきと感じました。特に能登の地震の中でこのような事例があったとは考えもおよびませんでした。犯罪を犯した人でも、更生をめざしている人々には手を差し伸べたいと感じました。

・(中学校教員) どんな人にも人権があることはわかっていることだが、今回のテーマになった更生保護の対象となっている人ももちろん「人」である。その人の人権について考えていくことは、まさにすべての人の人権を考えることにつながると思います。こと、授業実践に活かすという視点で考えるととても難しい課題であったと思います。保護司の処遇改善を切に願います。もっと国が本気を出してほしいと思います。命をかけているのに、ボランティアとは、大問題です。

・(中学校教員) 学校内ではなく、社会の中での人権の問題としてのお話で、とてもデリケートな問題でした。内容が公に表すのがしづらいので、啓発が必要だと思います。

・(中学校教員) 大切なことではあるが、身近に起きた経験のないことだったので、「自分事」として考えるよい機会をいただきました。再犯者が減るよう、学校に戻って、生徒にこのことを伝え、一緒に考える機会をもちたいと思います。

・(中学校教員) 罪を犯した人⇒罪を償った(償っている)方々の更生保護の活動について、まずは知ることができて大変よい機会をいただきました。これを機に、もっと理解を深めるために学びたいと思います。現代社会は、以前と家族のあり方、生活の変化もあり、支援者、理解者が以前より必要な方が増えていると思います。事例を考える活動、グループ交流は、主体的に活動できてよかったです。

・(中学校教員) 教師の立場からは、なかなか関わる事が無い事柄について、話を伺うことができてよかった。私自身は虹の松原分校に勤務したこともあり、犯罪を犯した生徒や様々な問題をかかえた生徒を支援していた経験もあり、身近なこととして聞くことができた。教師もさまざまな視点から、教育を考える機会をもつことが必要であると感じる。

・(中学校教員保護司の方のお話を初めて聞きました。何となく知ってはいましたが、今日の交流会で理解することができました。「官と民が一緒になって活動が行われているのは珍しい」と言われましたが、保護司の方がしっかり話を聞いて状況を把握され、官がその対応をしていくというのはとてもよいシステムだと思いました。社会全体のつながりや偏見をなくすことが大切と言われました。地域にいる私たちが保護司の方と同じ思いや視点をもって、対象者の人たちに関わっていくことが大切だと思いました。やはり、人と人とのつながりが重要な解決策だと思いました。ありがとうございました。

・(小学校教員) とても考えさせられる内容でした。自分の中でも解決のための考えはまとまっていません。罪を償った人、「罪を憎んで人を憎まず」が認識として定着すればなあと思いました。

・(中学校教員) 罪を犯した方々への社会復帰へ向けた、保護司の方々の献身的なサポートには頭があがりません。我々が今こうして、『治安は悪くない』と感じられるのはそのような、支援があつてこそだと思います。私自身も広い視野をもち、知ることを大切にこの問題について考えていきたいと思います。

・(中学校教員) 更生保護という活動について知らないことが多く、今回の実践交流会で知識を得ることができました。実際の活動としてどのようなことをされてあるのかが分かり、自分の教育活動に繋げていきたいと思いました。ありがとうございました。

・(中学校教員) 恥ずかしながら、保護司という役割について無知でしたので、参加させてもらい大変勉強になりました。どのような理由で犯罪を起こしたのかわからないですが、その背景を知り、社会の中で誰一人見捨てないという考えは、基本的人権を大切にされているのだと感じます。この役割が、民間のボランティアで成り立っていることが素晴らしいことだと感じました。

・(中学校教員) 初めて保護司の方の話を聞くことができ、いい機会になりました。社会の方々は保護司の仕事を知らない人が多いと思いますので、啓発をして頂ければ、保護司の仕事を知る人が多くなると思います。また、避難所の件で付箋に書く作業は授業や職員研修でも使えると思いました。

・(中学校教員) 近年、少年が犯罪の加害者側に巻き込まれるケースが多くなっているように感じます。家庭環境等の問題から十分な教育を受けられないままに犯罪に手を染める、もしくはその危険性があるような場所に行く等、さまざまな課題があります。また、昨年末の北九州の事件に代表されますように、ふと「目が合ったから＝

つい魔が差して」犯罪を行うケースも少なくありません。その少年/青年たちが保護観察中もしくは後に社会に出ることになった時、いかに「魔が差さないか」、つまり犯罪を繰り返さないかの支援が必須になってくると思います。性善説だけでは立ち行かなくなってきた現代において、お話の通り『『罪を犯した人』ではなくその人を見る』ことが大切だと感じました。地域住民の安全も、保護司の方の安全も、罪を犯した人の安全と社会復帰も、どれも守れる社会になるとよいと思います。

・(中学校教員) 今まで触れることがなかった視点で、悩み苦しんでいる人がいることに気づかされました。地域で支える雰囲気や姿勢が、大切だと思いました。また、失敗が許されづらい世の中で、立ち直すチャンスが求められるのは必要だと思いました。

・(中学校教員) 保護司さんの仕事について学ぶ事ができました。特に能登半島の事例は自分事として考えることができました。大地震という非常時においてすら、避難所入所を拒否する人がいること、それを公然と口にすることに愕然としました。そして、自分の中にも疑う気持ちや不安に思う気持ちがあり、偽善者である自分にも気付かされました。それを認めるのは辛いですね。

・(中学校教員) 保護司の視点で人権問題について講話を聞くことができたので勉強になりました。罪を償われた方の人権も大切ですが、被害者側の人権ももっと注目されるべきとも思います。

・(中学校教員) 「NINBY」という言葉を初めて知りました。原発などの忌避施設のことに限らず同和問題をはじめとする人権課題にもまさしく当てはまると思いました。自分の中にある自分が不利益を被らなければOK、自分が不利益の当事者となったらNGという思い。能登の避難所の出来事について付箋に書いたり、フロアの発表を聞いたり、グループ討議をしたりすることでこのことを突きつけられたような気がしました。今回の研修も自分の弱さや差別性、マジョリティ特権意識を炙り出されました。ありがとうございました。

・(中学校教員) 講師の「その人の今を見る」という言葉は、教育に携わる私たちにもぴったりあてはまる言葉であると思いました。私の父は保護司をしていましたので、講演を聞きながら、保護司の責任の重さや大変さを改めて感じました。

・(中学校教員) 今まであまり知らなかった内容だったので、詳しく聞くことができよかったです。私の友人も保護司をしているが、ボランティアでやっているのも知らなかったです。また、事例演習では、きれいごとで考えれば罪をつぐなった人の人権を配慮していくものと思っているが、殺人や窃盗の犯罪を犯したことで知れば、やっぱり自分を守る行動に考えが傾くだろうと思いました。貴重な話を聞かせてもらってありがとうございました。

・(高校教員) 初めてのテーマで、とても深く考えることができました。結論は出ませんし、解決策も出せませんでした。しかし、第三者になった場合、当事者の気持ちが理解できるような人間になれるように、これからも学びを継続しなければという気持ちにはさせて頂きました。

・(高校教員) 保護司という職業について初めて知りました。精神的にもかなり気をつかう仕事でありながら無償ということに驚きました。能登の被災地での事例について意見交換でき、とても有意義な会でした。

・(高校教員) 保護司のことを初めて勉強することができました。民間ボランティアであり、無給であることにも驚きました。しかし、こういう人がいないと社会が回らないのも事実なのだと改めて感じました。私の身近にはいないので、もっと話を聞いて、いろいろ勉強したいと思いました。

・(高校教員) 再犯率が増加している中で、犯罪を犯した人を許容できるかと問われたら、今の自分は許容できないと思います。差別してはいけないという言動は示せますが、内心では警戒心みたいなものがはたらくのではないのでしょうか。事例内の更生保護女性会員の方のように常にやるせない気持ちがつきまとう問題なのではないかと思いました。

・(高校教員) 保護司というなかなか身近にいない方から直接お話を聞くことができ良かったです。存在は知っていても、詳しくは全く知らないことばかりでした。

過去からの経緯があるとはいえ、民間の好意に頼った制度自体は考え直す時期なのではないかと思います。

・(高校教員) 正直な気持ち、自分の中に差別心があることに気づかされた。頭では受け入れるということが社会にとって、犯罪を犯してしまった人にとって大切なことは理解できる。しかし、感情が追いつかない。家族や特に子どものことを考えると、どうしても一步が踏み出せない。難しいかもしれないが、場を変えることは可能だろうか考える。地域コミュニティは無数にある。そう考えれば居場所は全国無数にあると考える。これは、地域コミュニティからの排除となる考えでしょうか。犯罪を犯した人たちも、もちろん受け入れてくれる人がいて、居場所を見つけられた人もいると思うが、冷たく差別心をもたれる場所で受け入れてもらうために、その地域に受け入れてもらえることを期待し、自分も受け入れてもらえるために頑張るとするのは、ストーリーとしては心を打つが、現実としてとても厳しい場面があると思う。そんなに簡単に場を変えるというのはできないと思うが、国や地方公共団体の行政の力でも、そういった支援ができないだろうか。自分だったら、自分のことを知らない新たな場所で、新たなスタートを切りたいと思った。・・・と、ここまで書いて、場を変えるというのはやはり現実的にも厳しいとも思い始めました。「理解をしたい」、「理解をする」にはまず「知る」ことから、「対話をする」ことから、少しでも一步前に進めるよう自分のことをしていきたいと思えます。

・(高校教員) 普段聞くことがないテーマで大変勉強になった。身近に犯罪を犯した人がいないため、20年程継続して数が減少していると聞いたときは意外であった。実際の事例を考えることで、社会での受け入れの難しさを感じた。犯罪をする人は、そうなる環境にあったと考えられるため、社会全体でそのようなことをさせないように、たくさんの方が関わる環境が必要だと思う。教育に関わる立場の人間として、相談してもらえる環境をつくりたいと思う。

・(高校教員) 今回、ご講演いただいたことで、罪を犯した人たちの更生について、初めて考えることができた。特に、被災地での事例を通して、もしそのような状況で自分だったらどうするか考えた時に、やはり家族に近づけたくないという思いが自分の中にあることに気づいた。しかし、罪を犯したとはいえ、同じ人として、その人の人権を尊重しなければならないとも考える。意見でもあったように、私は「その人を知る」ことが大切だと感じた。ただ避けるだけでなく、関わることで、あるいは関わりを通して「信じている」というメッセージをその人に送ることも大切だと思う。

・(行政職員) 人権課題の17のうち、ふれられてきにくかったところを深く掘り下げられてよかった。「罪を犯した人」というくくりが重い。だれでも罪を犯す人になりうる可能性があり、加害者、被害者の立場に立って考えていくアプローチが必要だと思いました。地域で、人権のネットワークをゆるやかにつくっていくことが、人権課題の解決につながるように思います。

・(行政職員) その人の今を知ること、見ることが大事だという言葉が響きました。「更生保護」がテーマの講演は今回初めて聞きましたが、とても分かりやすかったです。

・(行政職員) 罪を犯した人の更生に関わる保護司の仕事について学ぶことができた。事例検討により、被災者、罪を犯した人、避難所を運営するスタッフのそれぞれの立場に立って、自分ごととして考える時間を持つことができた。理解していることと、実際に行動に移すことには、正直、壁を感じてしまう。あらゆる差別の問題と同じように、先入観や思い込みにとらわれず、相手を理解することから始めなければならない。

・(行政職員) “知ることから始まる”まさに実感しました。講座を受けてよかった。初めて聞いた話でした。

・(行政職員) 無罪推定の原則の考え方について、現実にはそうならないなと考えさせられる。ニュース等での報道のされ方により、罪の強さが印象づけられ、後日、全く誤った内容だったと言うことがある。能登半島の事例の「その人は困る」といった数人について、言った人たちが「その人」と無関係なのか、関係者なのかにより、考え方が変わってくると思う。

・(行政職員) 意見交換の中で、「『罪をつぐなった人』によりそって」という表現はどうだろうとありました。とても良いと思いました。「罪を憎んで、人を憎まず」・・・と思います。避難所での対応など、自分はどのようにするかを考える時間となり、とてもよい学びができました。

・(行政職員) NIMBY：折り合いをつけることは、子どもの頃からの教育を強化していかないと困難であろう。

現段階では、各論反対になる集団は多いだろう。

・(行政職員) 具体的な事例をあげて実際に直面したら自分がどう行動するだろうと考えることができよかつた。その人の今を見て、話をしてみても判断することが解決策だということが分かりました。行政面でも再犯防止について取り組まれていることが分かった。

・(行政職員) うちの父が昔々保護司をしていて、こんなことをしていたんだと、あまり知らずにいました。その役をしていて、すぐに体調を崩して長くしていたわけではないのですが、……。知らなかったとはいえ、このように大切なことをよく知らずにいたことに反省……。再犯を防ぐ……。というものの……。大切だと思う。

うちの受け持ちの子が万引きをして再犯。うそに対する対応をしている。

知的障害をもつ子は、あまり認識ができず、再犯をする。悪いことと分かってはいるが、「ほしい。食べたい」に負けてしまう。お店がたくさんあるという環境で、うまく整えるのが難しい点もある。

再犯させないようなプログラムがほしい。⇒少年のプログラムは難しく、理解できない内容らしい。(受けに行つたが、難しかった。) とにかく今は声をかけて、「～は悪いことだよ」と皆に言うようにはしているが……。

### 【次回以降実践交流会希望テーマ】

・(小学校教員) 学校現場に関わる方の話ではなく、今回のように一般社会の中で福祉などに関わる方の話は、なかなか聞く機会がないのもっと他の仕事や立場の方の話も聞いてみたい。

・(小学校教員) 実践交流会という名で募集をしているので、何らかの実践が必要だと思う。多くは教員なので、授業や年間を通した取り組みなどを聞こうと思ひ、多くの先生はこの会を選択しているのでは？ 選択する時期に講演会だとお知らせがあつていたら申し訳ございません。最近で言うと、LGBTQ について考えてみたいです。本日は、企画から運営までお疲れさまでした。

・(小学校教員) 児童・生徒の賤称語発言への対応(佐同教のHPにある職員用の動画を見ましたが、実際に話を聞きたいと思ひました。)

・(小学校教員) 保護司のようにとても重要な役割だけどもみんなが知らない、あまり知られていない役割の人から話を聞くような機会がいいかなと思ひました。

・(小学校教員) 法務省「刑を終えて出所した人やその家族に対する偏見や差別をなくそう」に準じた講師選定であつたと推察します。今後も文科省や法務省など教育公務員の業務遂行に即した内容、講師選定をされれば、どのようなテーマ、題材であっても学びの機会になり得ると思ひます。「当事者の話を聞きたい」「実践的な内容が聞きたい」という意見も多いと思ひますが肝心なのは参会者が自身の領分に持ち帰つて実践できるよう、研修内容そのものではなく研修内容をどう扱うかです。

・(小学校教員) 部落史や部落問題学習の実践交流

・(小学校教員) 一番聞きたいのは学級、学校に関わることです。

・(小学校教員) SNS やネットなどでの差別について 非常に危惧しているので。

・(小学校教員) 児童相談所の方や、刑務官、実際に子どもたちと関わつて下さつている方の話を聞きたいです。

・(小学校教員) 学校や社会での「いじめ」対応について。

・(小学校教員) アイヌ差別について。ウポポイの開館や、漫画『ゴールデン・カムイ』などで、関心が高まつている分、差別の歴史についても学びを深められたらと思ひます。

・(小学校教員) 17の人権課題はどれも大事だと思ひますが、この課題については今まで学んだことがなかつたので勉強になりました。近年(5~6年)取り上げられていない人権課題があればお願いしたいと思ひます。

・(小学校教員) 最新の部落史を学びたいです。詳しくは分からなかつたのですが、杉田玄白の解釈が変わつたということもちょっと聞いたので。

・(小学校教員) 人権・同和問題を地域や保護者向けの講話があつたらいいなと思ひます。今回の視点も含めて、より Open にできないかなあと思ひるのは軽い考えでしょうか……。

- ・(小学校教員) 人権・同和問題を地域や保護者向けの講話があったらいいなと思うこと。今回の視点も含めて、より Open にできないかなあと思うのは軽い考えでしょうか・・・。
- ・(小学校教員) 次は(犯罪)被害者側で考えたい。
- ・(小学校教員) 外国人の人権について。(改善が進んでいるように思うが、実際はどうか?)
- ・(小学校教員) 実際に起きたことではあるが、私たちの生活の中にある差別について考えることができたことはよかった。身近な生活の中にある差別について人権問題として考えたい、知りたいと思いました。
- ・(小学校教員)・LGBTQ、女性差別 など
- ・(小学校教員) 教員なので、教育的立場として人権問題や差別事象について話を聞くことが多いので、今回のように教育的立場ではない方からの話を聞けるのは貴重だと思いました。
- ・(小学校教員) ジェンダー平等への実現に向けて
- ・(小学校教員)・沖縄の基地問題 狭山事件等のえん罪事件について VOISS の活動内容
- ・(小学校教員) 不登校やひきこもりに対して学校や地域としてどのようなつながり、交流の場があるのか、行政的なこと、保護者会的なこと、様々な立場からの話がきけたらいいと思います。(特にひきこもり)
- ・(中学校教員) 様々なハラスメントも、人権問題としてとらえていければいい。
- ・(中学校教員) 身近な事例があるといいです。
- ・(中学校教員) 性的マイノリティについて、家族と話してもあまりに関心(自分たちに関係ない、勝手にやったらいい、みたいなことを言う)(反対しないが勝手に好きにすればいい)というのは真に理解しているのではないと思います。理解を広げると言うよりも、それが当たり前の社会になるよう、取組を進めていきたい。
- ・(中学校教員) 今回の講話のように、日ごろなかなか表面に出てこないような問題や事例について学ばせていただきたいと思います。本日は、ご講演を企画していただきありがとうございますございました。
- ・(中学校教員) 闇バイトの背景
- ・(中学校教員) ネットリテラシーについて研修したいと思います。
- ・(中学校教員) 本日のテーマのように、今まで知らなかった、出会うことの少なかった人権問題に興味があります。
- ・(中学校教員) 不登校児童生徒が全国で30万人を超えるという、この異常な状況について考えていく機会があると思う。
- ・(中学校教員) 犯罪被害者の差別について、クローズアップして欲しいと思いました。
- ・(中学校教員) 高齢者問題、障がい者問題などの先進国の取り組みなど。海外の人権問題への取り組みなど
- ・(中学校教員) 改めて、今、男女平等。子どもの権利。障がい者の権利(インクルーシブ教育)。
- ・(中学校教員) 避難所の人権
- ・(中学校教員) 障がいのある生徒/グレーゾーンの生徒に対する偏見・差別事象についてお聞きしたいです。生徒からすると、どうしても「支援」と「あの人はあだから」という「差別」はなかなか切り離せないものであるように感じます。その意識を変えるために、我々教員はどのような言葉がけや支援が必要か知りたいです。
- ・(中学校教員) 佐同教の考えに準じます。
- ・(中学校教員) 今後も様々な人権問題を取り上げてください。
- ・(中学校教員) 国際化が佐賀でも進展する中で、外国で育った子どもが地域の学校に児童生徒が入学、編入している。その際、外国籍の子どもに対し、学校での受け入れや進路保障に取り組まれている方がいれば、話を聞きたいです。
- ・(高校教員) 無意識の差別
- ・(高校教員) 障がい者の差別事案や解決に向けたもの
- ・(高校教員) 人権、差別とは関係ないかもしれませんが、薬物などの依存症に苦しむ人たちの支援などに興味があります。

- ・(高校教員) 今日の更生保護の具体的な話をもっと聞いてみたいと思いました。
- ・(高校教員) 外国にルーツがある児童・生徒に関わる人権課題
- ・(行政職員) 「子どもの人権」(おとなが学ぶ)
- ・(行政職員) 「折り合い」をつけるとは? 総論と各論に係る機会を生かすには?
- ・(行政職員) ヤングケアラーや児童虐待を未然に防いだ、救った例を知ることができるといいなと思います。

【実践交流⇒事例「能登半島地震の被災地から『被災地での出来事』をつうして、考えてみましょう!」より】

① あなたが被災者の一人で、「かつて『罪を犯した』があなたの避難所に入所するかも知れない」と聞いたら・・・

- ・小さい子どもと一緒にだから、少し不安。何も言いはしなないと思う。なかなか言いにくい・・・。
- ・不安にはなるが、誰もが困っている状況なので、受け入れに同意すると思う。
- ・慎重になる。びっくりするかもしれないが、お互いに困っていたら、助け合うべきだと考える・・・。
- ・どういう罪を犯して、どういう経路で社会復帰されているか分からないので、怖い。再犯率も高く、何かあったらどうするのか。受け入れるのであれば、相談窓口の設置をお願いしたい。
- ・できたら遠慮してほしい。不安がっている人たちに新たな不安を抱えさせたくない。

あまり近くには避難したくないかも。どんな罪だったのかにもよるのでは。娘と一緒に、性犯罪だったりすると、ちょっといやかも。

- ・同じ被災者であるため、人間であるため、入所を認める。
- ・どういう罪を犯して、どういう経路で社会復帰されているか分からないので、怖い。再犯率も高く、何かあったらどうするのか。受け入れるのであれば、相談窓口の設置をお願いしたい。
- ・過去は関係ない。非常時でもあるし、助け合うべき。
- ・心配にはなると思う。どんな罪なのか分からないし、トラブルがあるとどうかと不安になる。人を知る。
- ・同じ被災者だから助け合いたいが、正直、不安な気持ちが大きい。
- ・驚く。話を聞く。拒否はしない。本人の希望に添う。性犯罪者は受け入れがたい。

自分とはもかく、家族は心配すると思う。よく知らないことが不安の原因になるので、その方を知るために話しかけたい。

- ・殺人なら少し引くかも。それ以外であれば困った状況は分かるので、我慢して静かにも守る。
- ・警戒するけど、態度には出せない。どんな罪を犯したのか情報(殺人、小児性愛、窃盗、再犯、刑事事件、強盗)を求める。それより留意することは何かを考える。その人に近くに行って、会話をもって安心してもらおう。
- ・間違いなく反対する。
- ・できたら遠慮してほしい。不安がっている人たちに新たな不安を抱えさせたくない。
- ・その人が本当に前科を更生していて、全く危険性がなければ入所させてもよい。現在のその人次第。
- ・社会復帰されているのだから、イロイロ言ったらイケナイと思う。一緒に過ごせるようにしていきたい。困った時はお互い様なので。
- ・いやだと思う。その人のことを以前から知っていて、人柄など掴んでいたならOKするかもしれないが、進んで入所を承諾することはない気がする。
- ・仕方ない。入所をOKする。
- ・家族に伝える。身を守るよう、一層気をつける。被災すると誰でも余裕がなくなり、危険なことも増えるので、気をつけるのは当たり前。
- ・家族の安全が保障されるのかが心配。困っている者同士、支え合っていきたいけど、悩んでしまう。
- ・心の中では嫌だが、仕方が無いので受け入れる。
- ・十分な説明をしてほしい。前科にもよる。再犯状況、精神状況。
- ・1000人も一緒に居る場で、かつて犯罪をしたからといって、何かできないと思うし、全然かまわない。周囲にも

そう言って説得する。

・ 犯罪の内容と再犯したことがあるかどうかによる。窃盗犯など犯した事が比較的軽い、もしくは再犯の恐れがないとある程度信頼できるのであれば、やや不安が残るが人名優先。性犯罪、子どもを対象とするもの、再犯をしたことがあるなど、魔が差す恐れがある。車中泊が加納であるなら、周囲の住民の安全保存が先。

・ 怖い。命を守るために、避難してきたのに、家族が犠牲になったらどうしようと迷う。

② あなた自身がかつて『罪を犯した人』で、「避難所に入所したい」と申し出た時の気持ちは・・・？

・ みんなが嫌がるだろうから、なるべく入所したくないが・・・。もう限界だから、受け入れてほしい・・・

・ 罪を犯したということがばれなければいいがと不安に思う。知っている人がいるなら、別の避難所を探す。

・ 受け入れてもらえるだろうか。「犯罪者ではなくなった」と言っても、難しい。

・ 刑を終えて立派に社会復帰していることを伝え、今は周りの人と同じ被災者であることを伝え、自分も同じ立場であると。

・ 刑を終えて立派に社会復帰していることを伝え、今は周りの人と同じ被災者であることを伝え、自分も同じ立場であると。

・ もう、外では生活できない。悪いことはしないので、助けてくれ。

・ かたみがせまい。罪を犯したという過去のことを知られたくない。

・ 「私は周りの人に受け入れてもらえるだろうか」と不安な気持ち。

・ 2ヶ月我慢したが、もう限界。自分の入所を拒否されるのは、仕方ない思いもあるが、どうすれば認めてもらえるのだろうか。

・ 避難所の片隅でいいので、入れてほしい。できるだけ目立たないようにするから・・・。

・ まわりから煙たがられるのを覚悟で申し出をした。

・ 頑張っはいたが我慢できず、申し訳ないが受け入れてほしい。入ったときの決まりは守る。

・ いろいろなことに遠慮して避難所へは入っていなかったが、もう我慢の限界だという気持ち。

・ すみっこでいいから、置いてほしい。何でも手伝う。おとなしくする。

・ 自分が罪を犯した事を周りの人に隠しておきたい。(差別されるのはイヤだから)

・ 「迷惑でしょう」と思って遠慮していたが、やはり、疲れが出てきた。もうこれ以上は無理だから、入れてほしい。

・ いやだと拒否する人々もいると思うが、命を守りたいので、全力でお願いする。

・ 自分も受け入れてもらうことが難しいだろうと遠慮すると思う。でも、不安を抱え、いっぱいいっぱいになっているのだから、頼れる人を探したい。

・ 寒いのでこれ以上続くと死ぬかもしれないので、助けてほしい。

・ ばれたらいられなくなるなあ。でも、オレも生き延びたい。罪を償ったのだから、あとは行動で示すしかない。だまってそこに居よう。耐えよう。

・ できれば入所させてほしい。「今は何もしない」と自信をもって言えるので。

・ 当然の権利。私は罪を償った。

・ 「もう死んでしまう」と思った時かも。でも、そのような状況になったことがないので、自分から申し出ることはない。

・ ゆっくりくつろぎたい。迷惑かけない。

・ 当然の権利として入所させてもらいたい。「罪を憎んで、人を憎まず」という言葉は何処へ？

・ 罪を犯したことで普段から関わりを避けられてきた。(そうしてきた)が、どうしても辛いから入所したい。知る人の少ない所へ行くか。

・ 入所に反対する気持ちは当然分かる。だから、2ヶ月頑張ってきた。けど、もう体力の限界。倒れてしまうから、入所させてほしい。

・ 廻りの目が気になる。何かトラブルがあれば、すぐに疑われてしまうかもしれない。

- ・受け入れてくれるのか不安でいっぱい。冷たい目で見られるんだろうな。
  - ・私はかつて罪を犯したことがあるので、皆さんに迷惑をかけたらいけないと思い、何とか車中泊で頑張ってきました。でも、日数がたち、私一人では体調的にも限界なので、できれば入所して支援を受けたいと思っています。何卒、お願いします。
  - ・出所した時点で十分反省してるし、更生したいと思っているので、そこは分かって欲しい。
- ③ あなたが避難所を運営するスタッフの一人で、数人から「入所を拒否してほしい」と言われたら・・・
- ・「助け合っていこう」と説得すると思う。複数のスタッフで目を配っていくと思う。対話を・・・
  - ・誰もがいろいろな悩みを抱えて困っている。それぞれの人が入れる場所にしたい。命を守ることが一番の優先順位にしたい。
  - ・それはできないと説明する。しかし、地震の被害に遭った上に泥棒に遭う事例も聞くので、拒否される気持ちも理解できる。
  - ・どちらの気持ちも分かる・・・自分が間に入ってどうにかするしかない！話し合いの場を設ける。
  - ・困っている人を助けるのはあたりまえ。！！「誰でも公平に接すべきだから、入所させます」
  - ・拒否する理由がない。一人ひとりの命は平等であり、今はそのすべての命を守らなければならない時である。
  - ・両方の立場があるので、自分一人では決められない。
  - ・なぜそう思うのかを聞き、その人たちに寄り添う。「どう本人が行動すると受け入れるのか」を話し合い、考える。
  - ・同じ被災者として、苦しい立場の時こそ助け合っていきたい。今だからこそ公助の精神が必要なのではないか。
  - ・行政に相談し、規則がないか尋ねる。要望した人に他の場所がないか検討してもらう。
  - ・本人の様子を伝える。本人の希望を伝える。人として「それはできない」ことを伝える。拒否している人の話を聞く。※義務教育、幼児教育の段階から、全ての人を受け入れて、更生に協力するということを学ばせておくことの大切さを感じた。学級を小さな社会としてとらえ、教育の場とすることが重要だと思う。
  - ・入所を受け入れる。断り理由はないから、全員に入る権利がある。
  - ・それはできないと説明する。しかし、地震の被害に遭った上に泥棒に遭う事例も聞くので、拒否される気持ちも理解できる。
  - ・今はこんな状況ですから、この人の人権を奪うことになります。それに彼（彼女）は既に償っていますから、そんな偏見もたれても困りますよ。どこからそのような偏見をもたれましたか。あなたからそう言ってくださいよ。それは法律違反ですよ。こんな状況ですから。「罪は償ったんですから」と言うだろう。言わねばならない。対話の場を設定する。だからこそ、向上精神が必要では？
  - ・他の避難所に連絡が取れたら取って、そちらに行ってもらおう。
  - ・自分では判断がつかない。他のスタッフと話し合いをもつ。個人としては、やはり、恐怖心がある。
  - ・悩みます。相手のことを考えてほしいことを伝える。
  - ・「もしあなたが申し出た人の立場だったら、どうですか」と言って、受け入れを認めてもらう。
  - ・気持ちは分かるけど、拒否はできない。どうにか、他の方が納得できる案を考えないといけない。
  - ・拒否する理由にならないので、そのことの説明をもとからいる人にしっかりと理解してもらわなければならない。
  - ・具体的にどんな困り事があるのか。お互いが安心して過ごせる空間が作れないか。
  - ・かつて罪を犯したかもしれないが、2ヶ月一人で頑張ってきた。それは今まで遠慮されていたから。入所したい人との話し合いをして、思いや状況を知る。入所したい人の思いを、拒否した人へ伝える。「自分がもし逆の立場だったら・・・と考えてみてください」と話す。
  - ・気持ちは受け止めつつも「同じ被災者です。今は助け合う時です。何とか理解していただければ」と言う。
  - ・今は更生している。罪を犯したのは過去。人権を尊重してほしい。※今を見て、対話の場を設けてもらう。
  - ・その人の身の上や状況も判断。もし必要であれば、別室も用意する。その人の安全も周囲の安全も守れるようにする。どうしたら「魔が差す」ことを防げるのか、話し合いの場は必要。その人の言葉を信じつつ対応し、内容によって

は対応を変える。「スタッフ」として隣に来てもらい、様子を見つつ、グループ内に入れていただくこともあり？

- ・人道を優先して、入所可能となるように工夫する。
- ・同じ被災者だから、入所させてあげたい……。でも、反対されている……。
- ・拒否を望んでいる方がいることはきちんと知らせた上で、この被災をみんなで乗り越えていきたい。「協力すべきことができるのであれば、一緒に助け合っていきましょう」と伝える。
- ・どう困るのか、実害は？
- ・確かに過去犯罪を犯したかもしれないが、現在は出所した人であるから、差別するわけにはいかない。
- ・「嫌なら、あなた方が他に行きますか」と尋ねる。